




株式会社 プリンスホテル
代表取締役社長 小林正則様

2010年8月4日

社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部
同 保存問題委員会
同 千代田地域会

支部長 丹下健三
委員長 丹下健三
代表理事 丹下健三



「赤坂プリンスホテル（グランドプリンスホテル赤坂）新館」の保存・活用に関する要望書

拝啓 時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

貴社におかれましては、グランドプリンス赤坂を始め、数々の優れたホテルの運営を通じ、日頃より文化の発展と継承に多大な貢献をされていることに深く敬意を表します。

さて、先般新聞を初めとした各種メディアの報道により、貴社がグランドプリンス赤坂の再開発に際して「赤坂プリンスホテル新館」を解体する方針であることを知り、そのご再考を要望する次第です。

「赤坂プリンスホテル新館」は、丹下健三の設計によって1983年に完成しました。ご高承のように丹下健三（1913～2005）は、戦後建築で初の重要文化財（建造物）となった広島平和記念資料館（1955）をはじめ、東京カテドラル（1964）、代々木国立屋内総合競技場（1964）、万国博覧会お祭り広場（1970）、東京都新庁舎（1991）等の設計を手がけ、我が国のモダニズム建築の歴史そのものをリードしてきた建築界の巨匠です。1970年代以降はイタリア、中東地域、シンガポール等世界各国に活動の場を広げ、世界的にも最も著名な日本人建築家としてその名を記憶に留めております。また、丹下は教育者として東京大学で教鞭をとり、大谷幸夫、楨文彦、磯崎新、黒川紀章、谷口吉生をはじめとする多くの優れた建築家を育てました。

丹下によるこの新館は1972年から計画が開始され、数々の変更を加えながら、10年の歳月を経て完成した、彼の転換期を示す代表作品の一つです。アルミカーテンウォールと熱線反射ガラスを巧みに組み合わせた銀白色に輝く外観をまとい、両翼を広げたような形状が印象的ですが、これは丹下が、かねてより現代建築が限りなく性能の良い「箱」に近づいていることに疑問を抱いており、モダニズムに「巨大な箱でないもの」を追求した結果と聞き及んでおります。首都高速道路と外堀通りに面したその個性的な外観は、赤坂見附、ひいては首都東京の顔といえる都市景観を形成していると言っても過言ではありません。また、内装においては、中にいる人の動きや着飾った姿が映える背景とするために、白を基調にしたデザインが展開されており、これらが通称「赤プリ」として親しまれているこのホテルの特徴になっています。

貴社におかれましては、この新館以外にも、同じく丹下設計の「大津プリンスホテル」、村野藤吾設計の「箱根プリンスホテル」、「新高輪プリンスホテル」、「京都宝ヶ池プリンスホテル」（等々の著名建築家の設計によるホテル建築を多数保有されておられます。また、再開発に際しては、新館に隣接する旧館（旧李王家邸、宮内省内匠寮設計、1930）を保存する計画と伺っておりますが、これらは貴社が建築家の創造行為とその作品に高い文化的価値を認め、建築文化を大切にするという並々ならぬ高い意識をお持ちになられている証であると拝察いたします。それゆえにこそ、昨今スクラップアンドビルドの風潮が見直されつつある中で、特に機能的に大きな支障も、また、構造的に不健全であることも認められないのではないかと推測されるこの新館を、竣工後わずか27年で解体されるという貴社の計画を非常に残念に思います。

是非とも今後の計画において、丹下健三によるこの新館を貴社のかげがえのない資産として有効活用して頂けますよう、ここにお願い申し上げます。

なお、社団法人日本建築家協会関東甲信越支部、同 保存問題委員会、同 千代田地域会は、「赤坂プリンスホテル新館」の保存活用について、出来る限りの協力をさせて頂く所存である事を申し添えます。

敬具